

北

のふれ

愛



美唄の「アイヌ古道」

江戸期の蝦夷地には、アイヌの方々が多数住み、縦横に往来していました。その「道」を調査しているのは、アイヌとは何の関係もない私しかないのは不思議なことです。私は、これを「アイヌ古道」と名付け、調査結果を発表しています。

今回は、私の所属する美唄歯科医師会が存在する美唄の「アイヌ古道」を紹介させていただきます。

北海道の江戸期の記録は、一部の地域を除き、松浦武四郎によるものが多く、美唄もその例外ではありません。

しかし、丹念に古地図や文献を調べると、松浦武四郎より古い時代のことがわずかながらわかってきます。

近藤重蔵の文化4年(1807年)の「蝦夷地図」(高木崇世芝(たかよし)先生蔵)には、驚くべきことが多数描かれています。

この地図は、近藤重蔵が將軍・家斉(いえなり)に謁見するときを使用した地図の写しであり、そこには、朱色の点線で描かれている「夷人通路」を意味するものが記載されています。つまり、アイヌの方が使用した道です。道と言っても、踏み分け道です。

川の名前として「イクシユンベ」と「ホロムイ」と記載され、それぞれ、現在の「幾春別川」と「幌向川」に相当します。

また「リビタリ」との記載があり、これは浦臼町三軒屋に相当し、その対岸には、晩生内(おそきない)川が流れています。

他の記録などから、この「アイヌ古道」の位置を確認し、その結果を、現行地図に黒実線と白実線で記載しました(図の右)。

栗山町アノロ川旧川口から、岩見沢市の萩野山スキー場の前

しり)川を結び三笠市の達布山を通り、美唄、浦臼町晩生内川につながるルートです。

このルートは、日本海側の増毛町や留萌へとつながり、また、栗山を経て千歳、苫小牧を経て太平洋岸に至る壮大なルートでもあります。

このように19世紀の美唄は、決して孤立した状態ではなく、アイヌの方々が縦横に移動していた地でもあることになります。

なお、近藤重蔵が将来に造るべき道路(図の左、黒実線)として計画した位置付近に、美浦大橋が昨年完成したことは、偶然ではないと思います。

さらに詳細が知りたい方がおられましたら、以下の文献を読んでいただくと幸いです。

平 隆一「松浦武四郎文献における「空知のアイヌ古道」(6)」(『アイヌ語地名研究14』pp.81-100、2011年12月 北海道出版企画センター)
平 隆一「近藤重蔵が二百年前に夢見た美浦大橋」(『チャシの里第37号』pp.5-6、平成22年12月 浦臼町教育委員会)

(平 隆一記)

